桑原ゆう

■ 第31回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞記念サントリー芸術財団委嘱作品

『葉落月の段』
尺八、三味線、オーケストラのための（2023）

曲名と楽器編成から、この作品の意図するところを汲み取っていただけることと思う。

西洋楽器と邦楽器とがそれぞれに背負う音や音楽の質、その音楽を成り立たせる言語構造や文脈は、まったくちがっている。私がつくりたいのは、両者のちがいをただ対比して見せる音楽でも、わざと均して扱う音楽でもない。ちがいの奥にある、各々の音楽をその音楽たらしめる「いのち」を見きわめ、その「いのち」がそのまま縦横無尽に、存分に躍動しながら、互いに互いの表になり裏になり、支え合い、共生して、ひとつの形をさがしていく…、そんな音楽である。

そういう音楽を試行錯誤しながら、自分の生を確かめ、洋の東西もない、音や音楽の普遍性や核心に迫ろうとするのが、私の作曲である。

Solo Shakuhachi－Solo Shamisen－2 Fl（2 Picc / A-Fl）/ 2 Ob / 2 Cl（Bs-Cl）/ Fg / C-Fg－2 Hrn / 2 Trp / 2 Trb / Tub－4 Perc（Ⅰ=Chinese Cym / Tam-Tam / Ratchet / 3 Gongs / 2 Wood Blocks　Ⅱ=Bass Drum / 2 Wood Blocks　Ⅲ=Vib / Guiro / Bongos / Hi-Hat / Ratchet　Ⅳ=2 Timp / Wood Block / Rins on Timp）－Pf－Hrp－Strings（12-12-10-8-6）

桑原ゆう●Yu Kuwabara
1984年生まれ。東京藝術大学および同大学大学院修了。日本の音と言葉を源流から探り、文化の古今と東西をつなぐことを軸に創作を展開。国立劇場、静岡音楽館AOI、神奈川県立音楽堂、横浜みなとみらいホール、箕面市立メイプルホール、ルツェルン音楽祭、ACHT BRÜCKEN（ケルン）、ZeitRäume（バーゼル）、Transit 20・21（ルーヴェン）、I&I Foundation（チューリヒ）など、国内外で多くの委嘱を受け、世界各地の音楽祭や企画で作品が取り上げられている。楽譜は主にEdition Gravisより出版。「淡座」メンバー。国立音楽大学、洗足学園音楽大学非常勤講師。第31回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞。https://3shimai.com/yu/

©hiro.pberg_berlin

田中弘基

■ 第33回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『痕跡／螺旋（差延Ⅱ）』
オーケストラのための（2021～22）

初演　2022年5月21日　東京藝術大学奏楽堂
藝大定期 第410回　藝大フィルハーモニア管弦楽団 新卒業生紹介演奏会

本作のタイトルにおけるTraceは、名詞としての「痕跡」の意味合いと、他動詞的な、「（「痕跡」を）追う、辿る」という2つの意味合いを持っている。則ち音楽は常に、現前する音楽に先立つ音響や素材の「痕跡」を「辿り」、そうして形成された複数の層を順次出現させ、あるいは同時的にコラージュすることによって全体が構成される。「痕跡」として幾度か出現・あるいは仄めかされる音響や素材を、時間的な隔たり（遅延）と共に、新しい文脈の中で他の音響や素材との「差異」によって新たに定義し続けることで、そこに決して一定の「主題―展開」的機能を生じさせず、各音響・素材の意味性が時間を超越して流動的に変化していく形式を模索した。サブタイトルにあるとおり、フランスの哲学者・思想家ジャック・デリダの造語である、Différance、日本語では「差延」と訳される概念、即ち（簡潔に述べれば）言語の意味を、差異と遅延の運動によって規定するアイディアからヒントを得て、このコンセプトを設定した。またSpiralとは、作中頻繁に現れる微分音を含んだ複数のモードが、オクターヴを内部でほとんど生じず、「螺旋」的な構造を持つことに由来する。ピッチ（音高）の選択は原則としてこれらのモードの基本形あるいは移行形に基づいて行われ、また時にはモード内のいくつかの構成音を「中心音」としてパッセージが生成されることもある。同時に、このモードではシンメトリカルな音程の分割が見られる。以上のことから、「オクターヴ」とその結果を内包する「自然倍音列」（則ち非シンメトリカルな音程分割）によって豊かな響きを志向する、本来のオーケストラ音響の設計方法とは異なったものを意図している。

3 Fl（A-Fl / Picc）/ 2 Ob（E-Hrn）/ 2 Cl（Bs-Cl）/ 2 Fg / C-Fg－4 Hrn / 2 Trp / 2 Trb / Bs-Trb / Tub－Timp（Tri / 4 Rins on Timp / Suspended Cym on Timp / Corrugated Conduit / Spring Coil / Buzzling Bow）－4 Perc（Ⅰ=Mar / Crotales / Vibraslap / Snare Drum / Thunder Sheet / Suspended Cym　Ⅱ=Chromatic Gongs / Thai Gongs / Sizzle Cym / Suspended Cym / Hi-Hat / Flexatone / 2 Cowbells / 5 Temple Blocks / Wind Chimes / Corrugated Conduit / Bell Tree　Ⅲ=Bass Drum / Tri / Ratchet / Harmonic Pipe / 5 Wood Blocks　Ⅳ=Vib / Lion's Roar / 5 Toms / Wind Machine）－Hrp－Pf－Strings（12-10-8-6-4）

田中弘基●Hiroki Tanaka
1999年6月23日神戸市生まれ。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、2022年同大学作曲科を首席で卒業。卒業作品が大学買上となる。第38回現音作曲新人賞受賞。斉木由美、小鍛治邦隆、折笠敏之に師事。現在、ドレスデン音楽大学修士課程作曲科にて、Mark Andre、Stefan Prinsに師事。

■ 第33回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『ダンシング・クィア』
オーケストラのための（2022）

初演　2022年9月17日　杉並公会堂 大ホール
アンサンブル・フリーEAST 第17回演奏会

向井 航

この作品は、アメリカ・フロリダで起きたゲイナイトクラブでの銃乱射事件および、ヴォーグなどのダンス・ムーブメントを含めたクィアのアクティビズムをテーマに、拡声器を持った英語話者による話し手とオーケストラのために作曲した。曲の冒頭は、クィアにとって最初のアクティビズムとなる『Das lila Lied』の歌詞の引用から始まり、その後第一部ではクィアなアイデンティティの解放と表現を行うヴォーグについて、第二部ではアメリカのフロリダで起きたゲイナイトクラブでの銃乱射事件について、ヴォーグダンサーや著名人、政治家の言説や演説を引用し、構成している。

この作品がアーティスティックなドキュメンタリー演劇になるよう、私は主にドキュメンタリー映画で使われるような映像編集技術を音楽変換することで、作品を演出した。またヴォーグを作品に落とし込むために、代表的なモーションからインスパイアされた響きのモメントを作り出し、それをクィアの人々に向けられた政治家やアーティストの切り刻まれたスピーチと共に繰り返した。打楽器のAnvilによって区切られる仕切りの中で強迫的に繰り返される細切れのスピーチは、徐々に前後の文と繋がることで、緊迫と連帯の中、ドキュメンタリー性をより強めていく。

さらにLGBTIQ+の象徴でもあるレインボーフラッグがヒッピームーブメントからも参照されたことから、私の過去の作品から『極彩色―Prinsessegade,1440』（ヒッピーの楽園クリスチャニアをテーマに作曲）、ゲイ・アイコンであるジュディ・ガーランドの『Somewhere over the Rainbow』、ベルリンのクィア・クラブで流れていたビート（前述のゲイクラブ銃乱射事件でも、犠牲者の追悼のために、ロンドンでヴォーグを踊り続ける動画が、SNSで急速に拡散された。クィアにとって踊ることは今もなお重要な意味がある）、様々なクィア音楽を引用し、平和と愛、そして“You are not alone”のメッセージと共に、作品のアクティビズム性は強調される。

私は、言葉と音楽の力を信じている。この作品はクィアを生きる「私」の言説である。

English Speaker－2 Fl / 2 Ob / 2 Cl（Bs-Cl）/ 2 Fg－4 Hrn / 2 Trp / 2 Trb / Bs-Trb / Tub－4 Perc（Ⅰ=Suspended Cym / Timp / Anvil　Ⅱ=Snare Drum / Cans / Glock / Shaker / Tri / Whip　Ⅲ=植木鉢 / Congas / 2 Wood Blocks / Hi-Hat / Cowbell / Ratchet　Ⅳ=Bass Drum / Toms）－Pf－Strings

向井 航 ● Wataru Mukai

1993年7月22日静岡県生まれ。東京藝術大学音楽学部作曲科を首席卒業後、渡独。受賞歴に安宅賞、クロアチア国際作曲コンクール優勝、メンデルスゾーン全音楽大学コンクール独連邦大統領賞、日本音楽コンクール作曲部門第2位および岩谷賞、第27回芥川作曲賞最終候補など。現在アントン・ブルックナー私立大学博士研究員。

©砂原 文

■ 第33回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『忘れかけの床、あるいは部屋』
スコルダトゥーラ群とオーケストラのための（2016／18／22）

初演　2022年11月10日　NHK505スタジオ
日本音楽コンクール作曲部門本選

松本淳一

この曲は「忘れる」「思い出す」といった私たち個々の認知、その体感や共通性について、下記の如く連続する楽章を用い表そうとしたものです。

“固有ピッチ群による、5つの前提＝床”
“オケピッチとの併走による、8つの体験＝部屋”

具体的には、冒頭、各々固有な調律設定を施したスコルダトゥーラストリング群が【床】＝前提を担当、そのピッチ感やリズムがほぼ全体に渡り奏される中、オーケストラは従来の調律ピッチ442Hzを貫きながら、この背景の如く続く【床】上にて都度多様な【部屋】＝体験を形創ります。

最初に【FLOOR 1/2/3/4/5】の5セクションが提示された後【ROOM 1/2/3/4/5/6/7/8】と進み、途中二度Remembering Floorというインタールードが挿まれ、最後【床】の変容や消失を経て全体を閉じます。【床】のピッチと【部屋】すなわちオーケストラピッチの強固で微細なズレは、床面に絶えず差異、相克、対立、曖昧、混沌、同化などを浮かび上がらせますが、時間経過や音量バランス、反復や再現などの手法により、徐々に忘れ去られたり思い出したりします。

ところで、私には時に、体験の記憶や認識がその人の「前提」のような部分と深く結びついて映ります。それは音楽でも同様、人は自己の体験前提と楽曲前提の掛け合わせ上に音を聴取していく部分があると思います。今作では、この楽曲前提またはフィルターと呼ぶべき働きの一部を「スコルダトゥーラ群による一定した感触」としてあります。ご自由なご聴取をお楽しみ下さい。

一方、作曲家としては、音楽や時代の集合的な記憶に蓄積された前提やパターン、好みや常識などの強力さを改めて考えます。

今作品全体は、そうした、人が無自覚に持ちあっている集合認知、その氷山の一角をツンツンつついてみたい……、そんな個人的欲望によっても紐づけられています。

3 Fl（Picc）/ 2 Ob / 2 Cl / 2 Fg / C-Fg － 4 Hrn / 3 Trp（Picc-Trp）/ 2 T（Bs）-Trb / Bs-Trb / Tub － 4 Perc（Ⅰ=Bass Drum / Mar / Cym / Cowbell / Bow of DB　Ⅱ=Suspended Cym / Glock / Guiro / Tri / Wind Chimes / Cowbell / Bow of DB / Electric Metronome　Ⅲ=Snare Drum / Tam-Tam / Antique Cym / Whip / Cabasa / Cowbell / Stand Cym / Bow of DB and Superball Mallet　Ⅳ=Timp / Anvil / Flexatone / 2 Shakers / Wood Blocks / Ratchet / Chimes / Tri / Big Stainless Bowl / Bow of DB and Superball Mallet）－Pf－Cel－Strings（12-10-8-5-6）－Scordatura Group=Strings（2-2-2-3）/ Hrp

松本淳一 ● Junichi Matsumoto

1973年4月20日北海道釧路市生まれ。国立音楽大学作曲学科卒業。エリザベート王妃国際音楽コンクール作曲部門ファイナリスト賞、日本アカデミー賞優秀音楽賞、第91回日本音楽コンクール作曲部門第2位。新国立劇場バレエ団委嘱『竜宮』（森山開次作・演出）や東京パラリンピック開会式「片翼の小さな飛行機」など作品や活動内容は様々。